



「理性の遊び」としての哲学論争：「体育・スポーツ哲学」からの挑戦

大阪教育大学 教育学部

専任講師 林 洋輔

I. 研究の背景と目的

学術における「遊び」研究——いわゆる「遊戯論」研究——において、分野を問わず参照されるべき古典文献として 20 世紀オランダの歴史家・文化史家であるヨハン・ホイジンガ (Johan Huizinga:1872-1945) の主著『ホモ・ルーデンス *Homo Ludens*』を挙げることは常套かつ慣例である。ところで「文化は遊びのなかに生まれた」ことをその中心的な主張とする当該著作の第 9 章において、「哲学の遊びの形式」と題された議論が行われている。しかし彼の議論は事実上の未完に終わり、遊戯論の発展に向けた重要な検討課題として「哲学」に着眼した考察が期待されている。他方、研究代表者の専門分野である「体育・スポーツ哲学」分野においては、所属研究者の主要な関心として「遊び」研究が往時より行われてきた。本研究ではこれらの学問的背景を受け、ホイジンガが未完のままに遺した「哲学における遊び」の議論をさらに展開させることを踏まえ、次の問題設定を行うこととして「遊び」研究（遊戯論）および「体育・スポーツ哲学」分野への貢献を企図した。すなわち西洋哲学における哲学（学問）論争ならびに「体育・スポーツ哲学」分野にて蓄積された遊戯論の枠組みに拠り、「哲学（学問）とは理性の遊びである」との命題の明示、さらにその哲学（学問）論争で最終的に追求されているものの実質を解明することが本研究（本助成）の最終目標である。

II. 理性の遊びとしての哲学（学問）論争

本研究の基礎理論として採用した『ホモ・ルーデンス』において、哲学（学問）論争が理性の遊びであることを傍証する次の言及を確認

したい。「哲学をも含めて学問はその本性として論争的なものである。そして論争的なものはまた、闘技的なものと切り離すことはできない」（邦訳 322 頁）。この言及から確認できるように、哲学とはいわば「勝敗を競うゲーム」として形式立てることが可能である。別の言い方をすれば、現代における運動競技の諸々と同じ形式のもとに哲学（学問）論争を理解してもひとまず差し支えないと言える。プラトンの対話篇において確認できるように、古代哲学における対話篇とは全編にわたりレトリック（修辞）や論証を通じて相手を「打ち負かす」ことをそのうちに含みこんだゲームといえる。すなわち遊戯論の枠組みを通じてプラトンの対話篇を捉え直すことで、「哲学（学問）論争とはゲームである」との命題が成立する。というのも、対話篇としての哲学（学問）論争には現代の運動競技などで確認できるように勝敗を目指して技術を駆使する局面が明らかに読み取れるからである。そして『ホモ・ルーデンス』の後段における歴史的考証——「哲学とは遊びである」との命題の妥当性の検証をローマ帝政時代、中世および近代にまで及ぼして行った歴史的考証——においても、推論や背理、想像力や感覚に訴えるといったいわば「理性の躍動」のもとで古代哲学と同形式の競技遊戯がなされている。ホイジンガの言及を引くならば、「ギリシア文化のあとにつづく時代の論争の弁論の営みのなかに遊びの本質があったことを若干指摘しておかなければならない。ただ、そういう現象はいつも同じ形式のなかで繰り返されておき、それが西欧文明のなかでたどった発展はあくまでもギリシアの範例をなぞったもの」（邦訳 316 頁）である。ただし、以上の議論より哲

学（学問）論争が競争形式を採る遊びであることは半ば論証されたといってもよいとはいえ、哲学（学問）論争においては、現代の運動競技におけるような勝敗の裁定役としての審判も置くことなく当該の論争が開始し、また終息する。こうした論争において目指されているものは、勝利とは異なるようにも思われる。それでは、論争では何が目指されているのだろうか。

III. 「生き方の強度」「生き方の確かさ」へ

哲学（学問）論争が勝敗の形式を採用しつつも実質的な勝敗を決しないことの意味について、それへ回答する契機を研究代表者に与えたのは自然科学と哲学両分野の碩学が争論した記録である『脳と心』（みすず書房）の読了によるものであった。両者は対論を通じて「新たな倫理」、すなわち人間の生き方の範型を構想していることが明らかとなる。このことを言い換えるならば、論争の当事者が結果として目指しているのは新たな人間の在り方、考え方、言うなら「生き方」の構想である。両者はいずれもこの「生き方」に即して議論を展開しているのであって、論争で戦わされているのは論争当事者による「生き方の確かさ」あるいは「生き方の強度」とも呼びうるものと述べてよい。論争に参画した哲学者たちが自らの思考を駆使しながら互いを完全に論破することなく勝敗を決しなかったのは、カイヨワにおける「アゴン」の不在あるいは不完全な終息などではない。「理性の遊び」である哲学（学問）論争とは、論争たちが当の論争を通じて自らの「生き方の確かさ」あるいは「生き方の強度」を試し、新たな生き方を構想する遊びである。理性の遊びとしての哲学（学問）論争とは「生きかたの確かさ」あるいは「生き方の強度」を試し、「生き方」を構想する遊びである、と結論づけられるのであって、この知見が本研究の到達点をなすと言えるのである。

IV. 総括と展望

論争とは一見、カイヨワの指摘する「アゴン」すなわち勝敗の形式を採る競技であるかに思われる。推論ばかりではなく想像力や感覚に訴

える修辞を駆使することは「理性」を用いた遊びであり、いわば表面上は勝利の獲得を求める競技といえる。しかし他方で哲学（学問）論争の実質で最終的に目指されているのは勝利ではなく、自らの志した「生き方」およびそこから派生するさまざまな価値観の強度——すなわち「生き方の確かさ」——を見極めることに存するのであって、論争双方における「生き方の突合せ」には勝利も敗北も存在しない。結論的に言えば、「理性の遊び」としての哲学（学問）論争とは論争者々々における己の「生き方の確かさ」を吟味し、新たに生き方を構想することにその本質的な意義が認められるのである。

向後の課題においては、論争のいわば始動因あるいは原因をなす部類に着眼がされてよいだろう。すなわち哲学（学問）論争の当事者が手にする書物への問い、よりより精確に言えば読書のありかたに着眼し、任意の論者における学殖の形成過程について検討がさらに行われてよい。というのは、任意の学問を志しその体系を発展させることが研究者あるいは科学者・哲学者の生き方を示すものであるのならば、その学殖の形成される源泉である読書を通じて論争当事者における知性・想像力・感覚そして意志といった心的諸機能つまり理性の形成される有様を跡付けることは、いわば「生き方の形成」に関心を寄せる複数の学問分野に新たな議論の一石を投ずることとなるからである

VI. 研究成果（抄）

1. Dialogue, Conversation, and Disputation as “Play of logos”: Based on Johan Huizinga’s *Homo Ludens*. *Memoirs of Osaka Kyoiku University* (大阪教育大学紀要・人文社会科学・自然科学) 第67巻、2019年、299–309頁。

VI. 謝辞

本研究の遂行に係る諸物品ならびに研究文献の購入、欧文成果論文の作成に伴う英文校閲をはじめ中山隼雄科学技術文化財団に多大なる援助を賜りましたことについて、財団関係各位に心より厚く御礼申し上げます。